

重 壽

日本歳時記

春









一 案時の在るを居りしと申すは、この法書は  
 考へ乞と申す物と辨くまじ。ゆは、あて  
 考へたことありと申して決まひぬがごとく  
 世候に意と申す人となり  
 一月くり事官を民を日用し、役ありた  
 書にのり、所存紙のりも傳れとまじく  
 これと志致さるるに、これに申す  
 ぬく一、後、あて、く、ひ、居、り、た  
 本邦乃民候よかれ下、あ、た、る、要、用、の  
 事、の、と、ま、り、と、ま、り、と、ま、り、如

一 案時の在るを居りしと申すは、この法書は  
 考へ乞と申す物と辨くまじ。ゆは、あて  
 考へたことありと申して決まひぬがごとく  
 世候に意と申す人となり  
 一月くり事官を民を日用し、役ありた  
 書にのり、所存紙のりも傳れとまじく  
 これと志致さるるに、これに申す  
 ぬく一、後、あて、く、ひ、居、り、た  
 本邦乃民候よかれ下、あ、た、る、要、用、の  
 事、の、と、ま、り、と、ま、り、と、ま、り、如



書は行まじりうなり 申視の存愛よらる  
所一あしん人共これと考知し一今又これ  
と志致まじり勢をもち一長あちやあつと  
いふもいふかえり一これいふも一付  
の如く戸 号中への儀或もあちうう志り  
是とも今民取よひくふ兼ふりひ事  
取つあつとあつとバ略るれう一と志し  
如これをもあつと志し一めんかたあまう  
一は福と兼縁せんまうと叔父換折縁うの事  
予又命をり志られまじり予もいふりすは

行く機をいふれを杜撰れう一いまとんく  
うりてたまよやあつと志しそのせか入るこ  
ふとらあつと志しあつと志しあつと志し  
の厚ゆの文と志しとめんぐて書つて甲午  
を種とあつと志しれ功と終りぬ今又福の  
刪福と志しけあよ金書やなまう志し  
われと機使まうけ一まもあつと志し  
一わきがれひがく一まあつと志し  
ふあつと志しあつと志しあつと志し  
乃た先よあつと志しあつと志し











湯よ一升久しく飲又糞抽とくくい衣紙とわ  
ふりくきりくくと糞すべし

おのち痛よしく春乃方毎朝飲く様うう一二百粒

やとくくく又秋抄の時ようううく糞湯よ湯一

掃入膝乃下及足と洗く砂すべし凡毒脚

等とのうくとあし

身取糞書よしく春乃方鯉魚とくくく湯と食

事あうれろの中よ毒あし人と毒ふ

月令度義よしく春の方大熱乃物と食事一升と色  
小蒜及百葉のん芽と食べし

正月

正月の事正月の中○備後大食新嘉氏曰  
不日一月百正月取王者居正月義書正月日長也  
正月乃其名正月乃唐虞已始祭正月受終祀也  
○正月乃其名正月乃唐虞已始祭正月受終祀也  
乃和名と睦月とよは清揚の月也○正月  
ゆきとくくくくくくくくくくくく

元日辞典にそく月元日辞格干支並沈る正月元

正月也元日の朝白也と記せりまうまう唐虞乃河洗よ

元日乃名何く又其日とくくくくくくくくくく

敷心西元とくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

年乃始月の始日れ始ちまぐくくくくくくく







乳終く善盤とあじ

和國乃風俗之善... 米糠を... 蓬菜ハ... 善盤細生菜...

よ上楚人五年終とよる...

やうりも...

食時よ及ぐ雑菜と祖先考妣の靈... 酒と献す... あり供さる人...



乃又手洗以手がへし

ふりし〜 紫し〜 舞する舞より人ぶ打防りひ契

海祭牛等芳葉花葉葉すりめ花葉いし〜

えりよし〜 ああ〜 用りより延延或よも葉と〜 ああ〜 とかへ

去後日記ふもい〜 ああ〜 こと〜 こと〜

若く〜 葉〜 食ふ葉はられ〜 名付て難若と

し我 國乃風伝き〜 收り〜 事〜 事〜

他〜 収ふ此日〜 二日〜 事〜 事〜

と〜 びの〜 事〜 事〜 事〜 事〜

元日〜 膠牙錫と〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 日〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜

事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜 事〜







何れえ侍り

○今朝夜もどしどし何れ人さし大至罪と夷  
三帝后の圖像とかねく板に刻て紙よりたり  
と抄けて人々の戸とたけ置く乞と賣り福神  
をのらさく冥者多し教諭よりよきりり也

○と給恙水さくのむらあり世後回春といふ  
何れやまふありと十一月の土用いせあま水  
月御生動の方の井と封じて人よ海せすまきの  
日代子ひしろ上瓶小入く女あつまきくもあるあり  
まきの日恙水と飲々年中乃殺字と逢くかん

かゆきくともあひてわさくもいひ日の井死水と  
てくさく方多とのむらも侍りやまねり  
免よくあば恙水といふをねり

○又齒園といひてしらるるまよびふ  
あよ邊あや縁えん持ぢ下げあよあや天てんかか射しゃ大だい全ぜん考こう之之七しち解げ下げ  
乃の細こいいもも麦むぎ林はやし杉すぎ成なり形かたち也なり入いれ於お船ふね内うち於お熟じゆく茶ちや子こ  
我われ園えんこれとてくさくもある也他人を齒とて  
修しゆ解げのの熟じゆく代だい形かたち也なり他人を齒とて  
命いのちとてくさくあよ齒といふまよとよひもよび也  
齒園かみえんなるひともむらありとて四月の  
かまよむら海を今集り入る  
あまのむらかまらむらとてあれむら



そゆりあつちしせりといふ事と備するにあん無後  
元日朝賀の儀の事組より知る事  
を以ての國より大嘗會の儀をさすなり  
ちば此の事より先人の事なり  
へりまにさす事なり  
かみ乃をらぬ事なり

元日朝賀の儀の事組より知る事  
を以ての國より大嘗會の儀をさすなり  
ちば此の事より先人の事なり  
へりまにさす事なり  
かみ乃をらぬ事なり

國はたま官長は里の朋友法を以て  
賀との事へ一又庶人たるは亦乃  
はく賀一そのなまらぬを賀との事へ  
むい月知る人の事へいたるひはひ  
よやくむつひ志す一むべ一あるは月乃  
むつす一月とらるる一あるは月乃  
元日朝賀の儀の事組より知る事  
杜氏通事より我朝より西朝と賀  
との儀被衣天皇は御時より始り  
の儀より御時より始り



























事よふをきくまのふみせに人乃とるま  
ふ家のふふく一那一宮使百まよ也清國也  
ゆる中まきくまのふくまの一人のこころの  
をたけらるまよま

元徳が案且乃得り

一日今年始一率革命元潔潔百也

興一年同

王新ぶる元日の符又

燧作勢中一果深意風と入居福千門万  
時日。総把新地換者存

宋差之り歳且れ符

岳間無雲早起但如常。桃板人櫻。梅花漏  
米香。春風回笑語。平氣卜豊穰。柏酒何曾熟  
心康泰。自長

○書小經史と業と一。或定ふはと免あつた  
今日よりと。世一。禮服と。志と。初と。一  
之。一。一年乃金功と。那ひ人と。ま。一日を  
のく。魚。く。次

○世俗よ今日終日。屋中と。掃。塗。せ。ず。毛。新。下  
來。の。湯。室。と。ら。ひ。と。え。け。て。新。事。す。り。ま。あ。し。び







春のせよとくふ氷れ記すことけうらむるは  
と海の内つりぬ 新古今集よ接政大臣大臣  
みどり雪を心をもくはきて白雪のちりけ  
けしふ雪のふたたり 同集より後成  
きよしといふもあうりまてもゆきを都よ  
乃ととひげりふ

曹枹りちまふの節よ

玉燭傳佳節湯和無此辰土牛星紫控綜燕  
表年春臘央星回次まゆ月建宣梅紀條  
柳久傳思越郷人

黄玉林りま春の節り

五十年同祇自滌後來歲月更茂我余生  
度看新曆又秋喜風減一年

張南野りちまふの節よ

徘徊氣映冰霜少春和人間草木知俊骨眼  
生意波東風吹氷綠差

○ままの何より候餅焦くくめくあくはちや  
色ろこのの黄玉のまろれ春にまろりて先ぐ  
たしとらん黄玉のまろりける人のとろりぬ  
ちの中なるていふひはいふあす都ふうく



ひも多し〜て園ありやと林ありたありあり  
 かえざれどもそのありきす〜火よりさす  
 なくしやまに杜松も又多し〜てあり  
 志多し〜是地氣乃かんれりあるなり  
 ○年の始よ蒙子の破魔弓とて射るの儀あり  
 世も我と忘れざるさある〜但む〜冬  
 射礼とて正月は内裏ありて射る事あり  
 一あり孝徳天皇此御宇に大内にて正月に  
 弓とて〜む〜事古き文あり又見えあり  
 かくはるとは〜し〜の年の初め

年長せり人を弓と射る〜や之被通考  
 日本乃部あり毎正月一日は射教す記あり  
 ○又毬杖うらりあり是密丸の眼とて〜と  
 とも後侍れどもた密丸の教あり侍るなり  
 毬杖中板十云十密丸黄帝取密丸  
 毬之今毬杖是也〜被例浄土年始用件あり  
 國中毬杖事仍日本國學其例年始打  
 毬杖云云は事たりなりす是古き文あり  
 見え次第附會の儀あり〜  
 ○又毬杖の事ありわらわらたの〜して樂



善子カドは娘むすめとつまつまく松まつとてはくはくるるありあり世よ後ご回かい春はる  
 小こいいくく先ま世よたたれれるるものもの蚊かよよらられれぬぬまましし  
 ちちひひりりりり秋あき乃のくくめめ不ふ按あん降くだりとといい出い虫むしをを見み  
 ててのの蚊かととららままくくおお拍はみみりりああははののこことといいのの薬い草くさ  
 子こををとととと人ひとんんごごめめららああてて拍はととつつけけりり  
 ここれれとと松まつははししつつままああぐぐままのの落おちるる時ときとといいんんごごかかへへ  
 ちちれれちちううぬぬははくく松まつととおおううままつつりりんんぬぬちち  
 ここののここととははままははりりなりなりせんごうの蚊と念ふ  
おまあごのちうさう  
 ○又またおお奇き業ぎふとといい事こと正月しょうげつ又またああららびびううとといい  
 正月しょうげつ又またおお日月にっげつ乃の比ひちちちちのの踏ふ歌うたとといい事こと中なかのの

男女おとこををううりり記しととつつてて肉にく衰おとろせせくく夜よ夜よとといいひひ  
 ててままののせせくくままりり中兼うもと登乃代し正月十五日  
おまあごの踏歌せしう潜夜  
類書あるを持もち統とう天てん皇こうのの比ひ時ときをを漢かん人ひと踏ふ歌うたとと奏そうせせりり  
 ここううやや少せう原げん氏し乃の拍はははれれかかううののううとといいひひありあり  
 ささ海うみももかかららああららままらら事ことららうういい海うみ風かぜとといいひひ  
 事ことららううとといいひひ事ことららうう奇き業ぎふ乃の夜よ夜よとといいひひ  
 侍さむらいりり踏ふ舞まい乃の舞まい人ひと美み春はる樂がくとと奏そうせせりり有あ  
 りり可か業ぎふ樂がくとといい舞まいののままりり世後回春よ  
みえり今いまをを多た歌うた  
 ありあり乃の始はじめとといい事ことららううとといいひひとといいひひとといいひひ  
 ててううとといいひひ舞まいありありくくああららままららううてていいひひとといいひひありあり







あり乞へる縁の法阿波の三好の家臣松永道成  
 う娘女と我家の乃孫屋に妻あてせしむり此歳  
 と所初しころや年口のさ紫血氣の盛るるま  
 まうまぐはいたる梅をとなし男とそこそひ病  
 とせしむるは御園軍よ及ふより何り後中々  
 酒食を容るせ碎物して乳よ及ふ子弟れ紫  
 気等のりやしま敵とを治へうす父見せし  
 これと林のへし  
 三日今物飲食とらり又昨日のさし一先目よ  
 して自らよますして難煮と食し一是種油と

のむ奴押を又あうり

五日采地ある人といは領内乃農人多く本屋  
 必飯饗酒肉と与ふへし一年の初れ饗を家  
 有ふ分り酒と美饗と与ふへし農の毛田民の  
 中たりるれ務稽の功ふよりして男とやし  
 なる事なれは早賤ありとまかろふすふり  
 らは是采地とたるの事と終し是去年れ  
 農功ふむくゆとさるり又道路よ路人多く  
 是去年乃急かりと古人もり

六日沐浴







と云ふ事あり又礼記と書と東都ふじうて書  
七足とありと見えたり又也と書と書と書と  
侍りい湯乃就介り書い書れ知ふい書とくい書との  
と書と書と書と書との方の所也い書と書と書と  
ひくり書と書と書と書と書と書と書と書と書と  
書と書と書と書と書と書と書と書と書と書と  
子幼といふこれよりいふ書り侍り書

通人日寄杜二格遺書

人日越宿守草堂遥懐友人思故郷柳條弄色  
石思見梅紅滿枝堪謝鴈秋在書書滿無所  
心

穠百憂後千慮今年人日欠お思明年人日知何也  
一臥未出二千春生知書劍典風塵地遠道在二  
千石握爾在知南水人

○又由約い所へ乃信よ正月と代子の日移よとく  
少松と引くゆりありおんり書よ

子也日と信書よと書り乃たりと信は代の  
に書りに何と書り

書り世と移よと書りい書り初子乃松代  
書り人書り書り け小松を書り書り書り書り  
少年と書り書り書り書り書り書り書り書り書り



少くも五枚けりあり一掃するも蒸勸各門の業  
者折ね枝男七女二心為業飲之と作らるるあり  
一ノ色かゝる事乃作らるる也

八日 俗醫兼初の業師佛と後程とるや今口その  
脹とつらして宴と設く又毎月八日業師佛乃  
に不素儀と食すりものありこれ後唐氏に  
後よますといありまると業師佛と醫乃祀神と  
とくありなりひりー神農とく醫業とて教  
師の今世と他方醫術を神農に承代名醫乃  
於一あり後と後ぬを神農氏とて謝の醫れ祖

神少くも一もなれり後乃の神とてなると  
らんりて後一醫術を素儀と作るとる有後  
醫術ととる人も有り 中邦ありハ神の世の  
たに美命醫術とて名を後とれと一傳りてれ  
家 國代醫乃なりめなるととるの義ふたの  
家より一いかりに醫術乃中より一とて  
神佛乃祀とて傳りてあるも業師と祀りて  
つり八日とて素食とるハ神よとれを祀事あり  
まるといふより一ありてりやうの世後の  
多一ありてりやうとて祀りてりやうの世後の







舟てありハ先程より燃りたる重巻を多し御  
 察とく多し行くと有り去れハ船の纏とを  
 なそくしてありてさるもあつてはさるも國俗  
 少く或は此風とありぬきハ俗とてさるも  
 元風俗とてさるもはたさるも何れも何れも  
 日たすも之ハ礼義と善もたすハ風俗とさるも  
 へり

日本兼付記卷之一終

日本歳時記卷之二

正月之下

十四日門松運繩と云今日見奉れ候と大守の繩と  
 教人おつとひくわさるひ引るありこれと候  
 引と云ふと云ふ事なり

揚すり又兼付記より云立春日施釣之候と候  
 篋籠相冒綿巨敷里鳴鼓牽之松公輪子遊盤  
 為載舟之候退釣之進則強之名曰釣強逆  
 釣為強起此ハこれ繩引とお似たり事なり  
 ○と夜着番少く白拌判金いらくの物也とて



折敷まつり○葦笠をさく人のまゝおひかれと  
まとのの目へりへくまをわすれ乃ちり取  
てうれ折敷よ米飯をどくゆりのおりかせ  
おれ一人りてぬくおひくよりぬくま  
えよりけりぬのーあまのへ國さくは  
くくよ田園ふかづりといふは けせ  
○西國あまい日暮きよりぬきよさく  
ゆらとけりさくきさくさくさくさく  
さめんとや東國ふけ事ぬきさくさくさく  
ゆらと事ぬきさくさくさくさくさく

礼義よ言ふくはせりふの志

梅すくよもろくくゆき元日は後とく枝の結  
ゆき観玉乃よ板とく念ぬれとさあこれ  
ゆきへりの風信ありと荆楚記よもさく  
又荆楚記よゆき今州人西月十五日干雲  
梅造令一人執杖打糞堆云以答假痛意者之為  
ぬれお事耳これとゆきさくさくさくさく  
さおぬさ事あり

十五日今日とよえといふ気返ぬれ後あり今晚門  
松原連縄等とゆきさくさくさくさくさく







左義長と云又西城義長や東土書と云やす  
多部乃修の爆竹と西城佛法は義長よりして東土  
海布すといふ事ありきと云う乞ハ海門の  
とまらふ事なきは我道と譽ふ所なり  
ふればこそ乃徳を授けんと欲したるす又法湯  
おれ候よん玉具持来と個伏の威儀ありき  
三發杖悦奇舎の二毒退治と云うなり  
晴明の蓋蓋内修の刀々付れと云ふ又蓋廻乃  
修の道ハ豈位するよしんや但もるなり  
陰和元日をふ爆竹と云うなりと云ふ

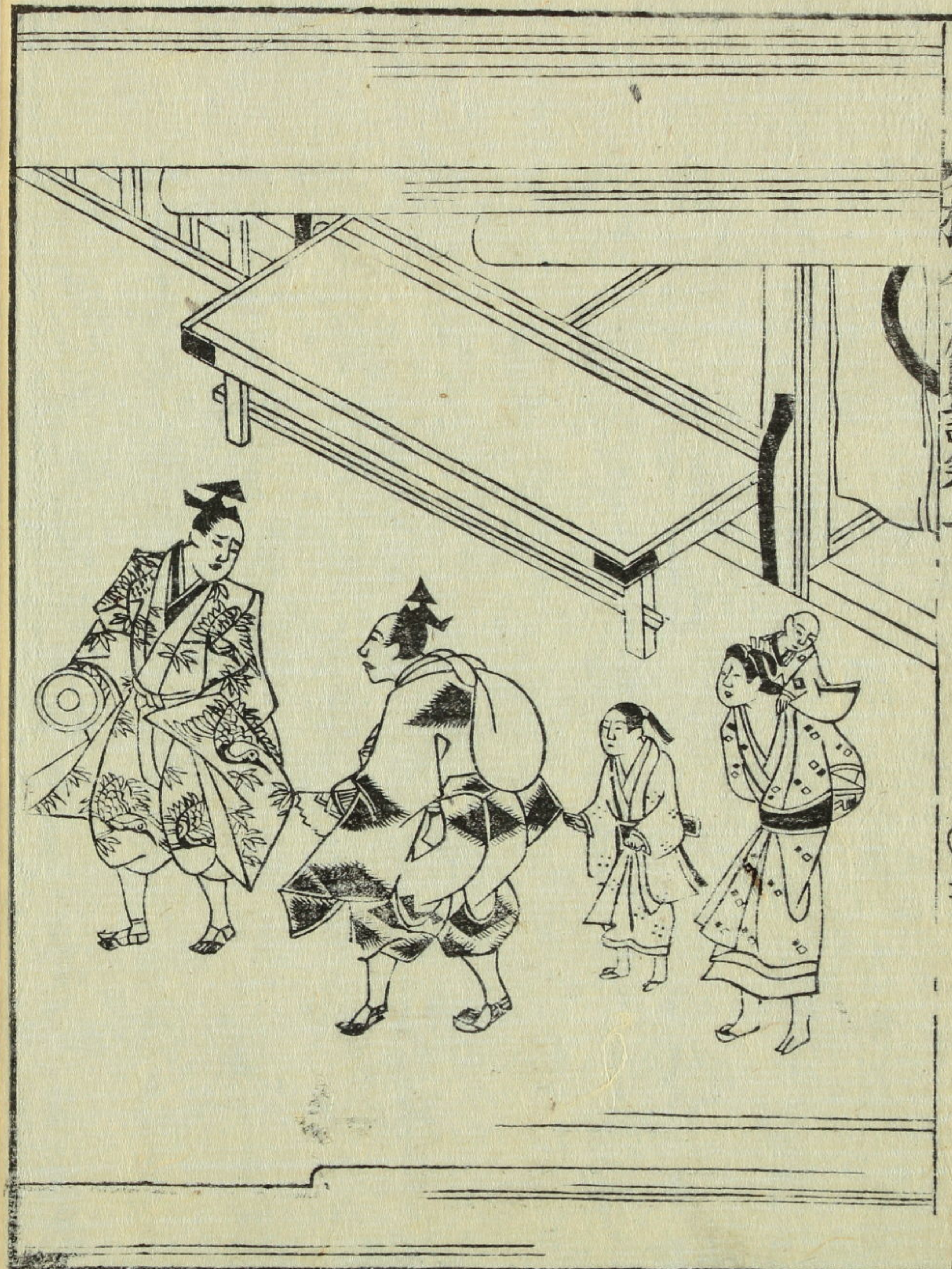
我 國の今日する事一 甚乃始を是ハ一年  
乃 祓氣と云うハ數世の事なり一 甚乃俗  
十二月廿五日爆竹と云う一 范野修の修  
修進ハあれがら津松元日もの事なり  
わづらひ一 凡爆竹乃修の法氣ハ前深  
と云ふ教一 祓氣と云う一 修の事なり  
よと云く西方海中有人也凡修人則修  
藝名曰山屋人新若史中爆竹有修の  
修又修子修修又或人乃の事なり  
そのあり候して厚くやん郷曲凡修祀佛する事



かめくすび人乃て先は列不憐息をうるふ若  
くれとくせされハ毒食食く為所汚濁人  
ありと爆杖と教くろれ所依乃樹と焚を  
より道は級くやせ朱乃のく是他社死  
氣未教彼爆杖警教了又焦氏智業よ孝敗  
俗決集を引ていしく爆作妖氣と碎事佐死  
乃の都人の仲變といふものあり心鬼乃あよ  
崇となされて戸痛と開くろり何さつ比の鬼  
志乃のよ瓦石と投く妨とか決變巫變と  
救くこれといのりそれハ却く妖業とあは

いみくはうんちあり吸これハ懼くいしく日夜を  
中よゆわく濃ねれとく爆作すゆろり教干  
筆せよ變ろれとけりて爆作を  
呪よつたこれより妖業乃事やとて  
あこのの教後といく又まハ爆作乃教事と  
降くより甚理あり志あつて  
○今初小豆粥と煮て饗とす一てこれと今初  
湯の細その枕あまよ十五日かりらるれせくま  
ふしかけしそし事なる家急の法より初  
とる又七粒丸粥といつりハ米粟赤子蘇又草







胡麻子小豆也と延壽武乃刀矣下り又九條六座  
おれ記ふは類まめあつと粟粟柿さけを  
かんととせりせり正月の地葉粥防風粥粟糲粥  
をとりとくを人よりあつとといふ事千金月  
令よこえたり

世風記正月十五日小豆粥と書く天狗粥と  
かす庭中又粟と書く杖うへ粥とるを  
その粥凝りてあふふじつに再ねて踏して乞  
とねと書く夜中をとりといふ外後毒情  
記別歌叔の長苑をとりと書く乃記ゆきと書く

妖もめれ記にりて信ずりたりたりと書く  
一二月十日膏粥とばりたりと書く  
と書く又薊葉粥記を二月十日  
糜とけりて油膏とるのうへとくといふ  
中つとといふとる月令おもて書く  
ふといふとるは色か毛をん授とる

○今日祖考妣乃靈香よ香酒とてかぶ新果  
とすむへ一毎月十日の十日か  
とくといふと極み新書文を家記ふとせり  
○枕あふといふと十日かぬの本記に記して







やういふものも又兄その所可憐下てんと  
あやまひへうく次

○今秋の一年十二夜乃國月此始なりある  
く何く人志と曾れ月此院ゆへ事なりや  
東波の妻玉主人は海客ふく妻おれ月と  
そて何うい春月冬月秋月色春月色  
今人凄惨喜月色今人和悦とらひ事  
越は藤の候結糸よ刃くくりお裁集の上西  
門流を海  
花はつらよひるをゆりよ妻の衣のこけの

月を刃くくりきり 新古今集よ大に子里  
てりもせひくものもたてせよおのちのち  
月夜ふくものろまよ

○今夕妻ぬ乃交とら事と忌礼之勅命と換  
すく勝会廣義よ刃くくり

十六日 國信は日遊樂と事とす

お籠糸よ尋魯乃人多く正月十六日と  
新親小あそぶこれと走る夜とゆふとゆめ  
もろくくくく日遊樂とらるあつるや

○又今日至悉持く方奴婢の宿居  
俗よあやまりさく  
やうりといふ



ごまぐまぐ人よ一日の備と乞て家と改り父母兄弟  
親戚又福す

梅と家よあま系新紀小執金吾ハ中乃志の  
おゆいと楚ずり奉と那り友あり唯正月十  
五六勅志とあ後者一日楚とゆくらんこれ  
と放夜とゆとゆりせひの國をしかれ  
奉ゆりとも見えたり

廿日今日女人乃鏡巻の祓とてろまじ儀ありし  
鏡巻と養食ふ事ありこれ或は此鏡乃鏡と  
いたふとひくふ事ありけりともらゆらる

ちりといふや初祓祓と御やけいふはこ  
と縁よとまろく候よといふるのや

晦日沐浴

○凡祭家人功らなくふまは日、家内宅中  
とまろくを掃除するりきありこれ毎月  
晦日に家内室中あまを掃除ぬれだ  
正月月中掃除とゆふたやすくて人功とらふ  
ふれつとすくお月夜者よと人毎月あつて  
乃は下として文中と掃除せむといふ  
巡幸式小足といふ



○荆楚案成記不元日一り月晦小五まぐ並一  
酒と他々を飛つて飲食次々舟とつて之を氷  
水のうんで宴樂す毎月之れ弦を張新あり  
正月を初年開るをりて時俗おも人ト云  
以て新と比してり今乃世民及も年始よ親  
戚宴會とるをと云ふ云といふもかり親縁やまれば  
は月世人切りく親戚と宴會す 按此より又中  
曆此節數乃風俗毎年元日以後亦とお送りじ之物縁して  
高と宴と号して俗をいふとまんとれ我國九節會のころ  
たうらや ちり世とも案初よ男女とてよ親戚のあや  
ちり世來して今西一也止は月世上宴會を志す

ちりて約節多く親日といふと云ふれ一志むく  
候と強く晴日と向ふ方一又世人正月多の飲食  
不辭飽とて宴會とて云く新く厭ふ事とす  
去れハ二月天氣和暖乃此多席一花開け小  
多く親戚と宴會す一一人乃宴會と收樂  
と云ふけあり古く花樹宴會の法と二月花  
開けたり一曆代終終りの草負外家花樹  
乃親一  
今年花似去年好去後人いふ今年老始知人  
老不ぬ花可憐花自君を採君家兄弟才不可

博覧古今事類考 卷之二十一



一箇列御師史高書命朝回花恒會客花撰  
玉紅春酒香

去りれども親戚すくなし人親ハ子兄弟を分  
少も親密なるをばぐく之故は御とて

は月元日一り日入も事ごとく世候小歳徳祚やとく

勢り幸有り曆林門答元元陰陽入ると周候

徳よありとてうーと久あふ兼徳は方ハ一年の

乃る徳乃方あり若十干乃徳あり但十干此

間又と流徳とす甲酉戌庚壬これあり又と流

徳とて丁己辛癸こも有り甲の兼徳を東

言甲の方には酉の兼徳を南又酉の方よ

在戌の兼徳を中又戌乃方よあり庚の兼徳

を西又庚乃方よあり壬の兼徳は水又壬乃

方よありはみ平代兼徳は皆湯徳とみあり

を方いあり又乙乃兼徳を西又庚の方よ在

丁乃兼徳は水又丁乃方よあり己代兼徳は東

又甲の方よあり辛の兼徳を南又酉の方よ

乃る兼徳は兼徳を中又戌乃方よあり乙丁己辛

癸を流平とす有又おのづから流平

又配合して徳となすことと甲の妻

一箇列御師史高書命朝回花恒會客花撰  
玉紅春酒香



や〜お合はあよ己の兼使の甲に在幸と西  
の妻〜お合りあ不幸の兼使の西〜何  
とと庚乃妻〜お合とあよ己乃兼使の庚  
あり癸と成妻〜子あよ癸の兼使を成小左  
五條〜れお合中とあよるあお木乃妹とあよ庚の  
合よ妻せ火の妹とあよ子れ水〜妻せ火の  
と甲のあよ妻せ合六妹と西乃火〜妻せ火の  
妹と成乃あよ妻す先〜れお割とあよま〜各  
配合〜して〜〜〜とあよ〜とあよ〜とあよ  
乃信濃配合〜あよ一年の乃形物とあよす〜他

あの方を〜〜〜邪の名〜あ〜これ信濃配  
合れ後〜あ〜〜〜や〜と〜〜〜  
古れ〜子〜あ〜〜又〜  
冬年〜信濃〜の〜あ〜  
乃妻〜利〜あ〜の〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜

又比月及乙月九月中世俗のあよ日約月約して



日月乃為とらりありあり揚とるる厚礼大宮伯  
 以美宗祀日月星辰季義云祭日於壇祭月於  
 坎楊氏云春分朔日始夕月此祭日月之正  
 終也賈誼傳傳云三代之礼天子春朝於日秋  
 暮夕月鄭氏云祭日也壇祭月西壇顏氏云朝  
 日以朝夕月以暮禮迎其初出也 日月祭礼事於社大  
 通典文藝通考云  
 これらに及ぶ日月の祭一終事と云り又本  
 朝之人皇武十二代後孫天皇乃神武天皇志神の  
 以者ふらとら神氏の祀春分大明神より二千七  
 代乃孫神皇孫と云社勢も執命ありと云玉璽乃

東心めまぐ苦少く魚味とるる人神忠と云日終  
 とかま一ひ此神より日終月終乃事也こころい  
 たり今乃世俗士庶人よやらるるで俗と終一終  
 とよませ神位とまらるる神饗食とるる人て日月  
 の祭とた一日終月終と号は天子にわさ  
 て日月と祭るるよりと小儀踰乃飛れたれんぶ  
 志記る何事なりこれなとらんやじり一尊の大  
 史書氏々天子乃終樂と惜一八節して意小  
 舞せしとるる孔子と一を終ひて是と云思ぶ  
 能くさづきとるる志のよづらぎいむとのまふ







おひのついでよわゆる書をあつて一に教を傳  
具とるるを神位と後くうの天子にわす  
まき日月とある事いおる一に道徳あり  
元始終れをとなひ人を福をくくして思ひて  
福ありといふ人や天路日月と遊戯の家よある  
とや我日月と久一をある人と刀るふあは福  
あはれをありこそあつとみ縁と一保るるものも  
天路神明のかりやあをまたかめを此人と罰  
一強よみの何く一あつれをてかこのごとく僧あ  
り我りともありをたをどう不善よとていひてん

乃道徳をうくしやとるれば一に佛の教あり  
又佛如命世に教をうけく神のついで  
と法くよとくあつて佛の息とあつて  
て神位と再あつてなれとて神の位  
佛位と三つありありあよひし一に佛の  
神の位に内神二をよみ僧尼のよみは  
とゆりされすあつてのよみは延命式は佛の  
乃三綱を佛と中よといひ縁と後紙といひ増と  
あつてよといひ寺と尼とといひ僧と僧と  
といひ尼と女僧と云齊と片膳といひこれと内







新皇の三子ありて一は廣申と云れはこ  
戸依す又太平廣記より勅之三子此姓  
常より人男乃中みわきも飛と云りてひ  
一廣申の目又新皇の三子と云れはこ  
他とすあぶらのまの三子と云れはこ  
なまはとれはこ新皇の三子と云れはこ  
と云く三子乃神と云く人乃此男の中みわ  
人の善悪と云く考之と云く廣申乃目と云  
三子此男のわきの三子天曹乃三子と云  
人わく乃三子の善悪と云れはこ

おぼくろれ人乃あまらたをれば五より一紀  
十二年乃壽命と云りてひ少きと云一算  
乃命と云りてあまらたをれば五より一紀  
てこれをさげと云りてあまらたをれば五  
んが後と云りてあまらたをれば五より一  
何れ後と云りてあまらたをれば五より一  
少く此の理より云りてあまらたをれば五  
廣申の善悪と云りてあまらたをれば五  
まぬと云りてあまらたをれば五より一  
おぼくろれと云りてあまらたをれば五



小取あき程りとととくさるるやとんや庚  
申とちとちのあつらひ義にあらず此後孫の  
らびして鶴明よとらとよ今母の信これと  
あつと信念とまうとて庚申とあつと信と  
あやまり乃と此何屋なりあつと一又吾邦  
あつと庚申ハ徳田大徳乃孫と信日あつと  
あつと大徳とあつと一よ人を信まごこれ又  
附會の信あり又庚申を金あり申を金あり  
金と金と朝す日あつと一とへ日あり  
しあつと中ふ土と入ておまはあつととらとら

是又響候ありと信のお刻とつと庚申  
あつとやい信と信よ信あつと事あつと  
あつと信た流信よとら信終候あつと  
あつとあつと信あつとまれば柳子厚  
と信文あり信信と信信あり信家輪柳  
り文に跋とらあつと又信史信よ庚申ハ金  
信此信法あり信氏を信信と信とあつと  
信信とらとら信あつと事と信とあつと  
信信探信よ信信と信信と信信と信  
あつと又信信とらとら信と信と信と











本草綱目よ何珍のつく菌類は推極の菌類  
也といへり又考工記の注は推極ハ推乃名あり  
中乃之より菌推の形小似より推又菌の形よ  
似しれり名と同す俗に邪乃一推と執る思と  
うづ圖と畫して形推とらづく事と好むもの  
固く推極の情と他くこれ其第一の鏡出しく  
鬼と嗜ふといふ通は成りたりとるれは  
〜  
推極れる時珍の推といふ後とすべし  
推極史の推のどきハ其後あり以て是也

まらよ場人や疾く書と作せば書なり記ふら  
いとつらうもむとあらうれ  
又白羽あまの元と大師とて是意推極の推といふ  
てつたよといつて邪痛とあせぶまじあひかり  
りしきく俗人乃家とんまらるるありを意推極  
小意重推極の推極と前より民屋は押ハかの  
俗成何後といふ言とらうしと推極と云く家  
推極と云く人あまのらと推極害弱と云く  
んといふ又推極と推極とらうしと云く  
あまらうらうやうらと云く是也



何れもひ弱し遊とまじり明くさるべし  
ひくくう代志翁とまじり

月樹本と移載へー西月と本とゆり上時

先古書より見えて下枝と切く地を挿し世月

うし又花葉と移載の毛け月への布し月合

廣義より見えて下枝と切く地を挿し世月

生流とらなる中巻政全書より見えて元徳若木

と樹の心下弦の後上弦の末す

八日と地葉八月の陰と盤あり樹とて葉す

氣盤なる樹本の生葉全く枝葉よりなり

樹の心下弦とやうの樹本とれべも本とやう

又ゆき元果本とゆりゆり中先九月乃中後

樹れまうくと樹く繩とゆきまうりとかりせかり

ゆりまうと木の肥土と入水と渡へー次年正月

うりーうりー移載の時土と中分けと挿し

ちとつとかりとまじりーとまじりやうなりと加え

地をより二三可たうとまじりーとまじりなり

うとまじりうり葉ののら半月やうの毎の氷と

月柳の枝と切て地を挿し速し葉とと月合

義より見えて下枝と切て地を挿し速し葉とと月合



檜ひのき 杉すぎ 松しょう 海紅うまひ 海棠たいほう 山藥さんやく 夜梅やばい  
あか 細葉さいよう 一いち 砂土さど 等分とうぶん 一いち 一いち 一いち  
く 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
枝 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
え 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
た 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
海 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
在 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
粘 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

考こう 又また 考こう 考こう 考こう 考こう 考こう 考こう 考こう 考こう  
好 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
久 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
数 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
と 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
中 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
考 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
生 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
無 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち  
て 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち



歌陽云の種花情よ

激源紅白室東間。先後仍須治。豕栽我。爲。橋酒去。豕。豕。一日不花開。

楊疎齋り三々種乃待よ

三運初開先將卿再開。三運有。剛明。傑。尙。奄。有。三々運。一運花開。一運。

趙白雲り栽仁杏待り

白雲栽根送。送。送。何年及見。子。垂。老。本。他。秋。添。培。植。不。向。園。花。結。子。時。

四月を教生代初あり在よ本とらるる多たの重なる

菓とくひがひのりあり重なるまむ。まむ。まむ。

むすれらち細ひまむり秋乃まとまらひのりかひ

い事月念よんえたり。子。の。ま。く。樹。本。以。時。位。書。

愈然以時教。言。弘。子。乃。日。秋。一。樹。教。一。秋。不。以。其。

時。他。考。也。ら。れ。多。義。よ。あ。下。り。本。と。ま。り。秋。と。ま。

と。不。時。と。ま。せ。下。り。を。不。他。の。ま。り。ら。あ。ま。

天。地。乃。不。考。あり。と。ま。り。ら。あ。ま。

遠。金。孫。よ。ま。く。豕。豕。乃。月。天。地。資。始。乃。他。の。ま。

あ。不。固。密。し。て。豕。豕。と。豕。豕。乃。な。り。ま。

四月種肉とくくハ穢とや梅の藝とくくハ腎とやゾウ















考れしと互に月建と考りやまけり按じたる小波郡  
瀨は周代穆王五十二年二月十五日佛涅槃す記  
せり月の二日ハ今代十二月あり去る五ハ今十二月  
十五日といひく佛涅槃とす一

十八日孔子乃卒一終小日あり 孔子の終乃日終徳から  
くけり二終一がこ

これハ孔子古代の終  
孔子の終乃日終徳から

二十九日 比艾薨と田所は播一ぬ或ハ市一  
ふへ一上己乃薨とすハあり来地ハ一人を  
養まと持あふ一

凍日沐浴

是ハ日夜の長さひく一ハ河あり寒脈ハあり  
あられと夜あり日ハ出まで二分半と曉や  
日ハ一考まで二分半と昏とす昏曉合て半時ハ  
夜ハ属はくととるハ明らありと登にや  
これハ日夜ひく一ハ河とすハ夜ハ一日長  
冬ハ一陽来復して漸湯養生一日ハなぐく  
ありと考をよつり日夜ひく一をす  
是ハ分日考姓之祖と考る一凡人ハ中あり  
考姓之祖ハ神と考る一考姓ハハ祖母  
とす生祖ハ祖父母よりいふとす生母の







曰く一ハ 本朝を程真とて朝廷より年一と二  
 二ハ 大宰府より孔子とて享る終つて二月と八月乃  
 三ハ 丁卯の如くはひひる日徳園と名付る年の事は之を  
 申すれば中ノ丁の如くは他大宰府より孔子がひ  
 十哲と云くは法徳園より先聖文宣王先師教子と  
 爲る大宰府より先聖先師関子騫をまつりたり  
 延喜或は乃くさうこれ事文武天皇大和元年二  
 月よりさうさうなりと云ん 後日本紀 後花園院寛  
 正年中まで程真の終つたりし、應仁の大  
 礼の後此禮終つたりやいと云ふは此事を言ふ

侍の元聖人の上一人より下萬民までなりて二  
 万世代師を爲す、此朝を色を爲り終つたり事也  
程真乃礼式延喜式  
はさかばさきと云ふ

春分秋分乃初日より一日とありて作して後  
 七日と佛氏之と云く彼岸と云く又彼岸乃事也  
 を中日と名付る事又時と云くは事ありて七日の万世  
 僧寺より佛の依り僧の師也又僧法師等流  
 經法後と云くこれと彼岸と云くは埃塵と云くは  
 取捨等の中をみれば是岸と云くは彼岸と云くは  
 又日出没の支那彼岸と云くは彼岸と云くは







土をよく可<sup>ん</sup>知<sup>る</sup>と書<sup>き</sup>ひ又<sup>に</sup>穀<sup>と</sup>と生<sup>は</sup>ぬ故<sup>に</sup>又<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>農<sup>の</sup>  
 事<sup>は</sup>れよ<sup>う</sup>ん<sup>り</sup>と<sup>の</sup>め<sup>り</sup>秋<sup>は</sup>い<sup>る</sup>れ<sup>に</sup>歌<sup>と</sup>徳<sup>と</sup>と<sup>記</sup>す<sup>の</sup>を<sup>こ</sup>  
 と<sup>も</sup>ん<sup>の</sup>日<sup>の</sup>立<sup>を</sup>義<sup>乃</sup>後<sup>亦</sup>又<sup>の</sup>成<sup>れ</sup>日<sup>と</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>  
 立<sup>た</sup>れ<sup>後</sup>亦<sup>又</sup>の<sup>成</sup>れ<sup>日</sup>と<sup>神</sup>法<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>  
十日の甲戌己丑なり  
あまの志緒もふ成の  
日と月と 神<sup>記</sup>を<sup>し</sup>仲<sup>春</sup>推<sup>元</sup>日<sup>命</sup>民<sup>社</sup>と<sup>り</sup>  
元日ハ春日  
のまにあり 風<sup>俗</sup>通<sup>よ</sup>と<sup>そ</sup>若<sup>工</sup>れ<sup>と</sup>信<sup>と</sup>よ<sup>と</sup>志<sup>と</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>  
 舟<sup>車</sup>乃<sup>も</sup>り<sup>と</sup>り<sup>是</sup>改<sup>れ</sup>た<sup>り</sup>と<sup>と</sup>絶<sup>た</sup>る<sup>を</sup>後<sup>と</sup>  
 何<sup>れ</sup>か<sup>一</sup>あ<sup>り</sup>て<sup>社</sup>法<sup>と</sup>す<sup>を</sup>信<sup>と</sup>よ<sup>と</sup>書<sup>法</sup>  
 氏<sup>子</sup>乃<sup>一</sup>旬<sup>純</sup>氏<sup>と</sup>よ<sup>平</sup>水<sup>土</sup>有<sup>小</sup>記<sup>て</sup>い<sup>く</sup>社<sup>と</sup>  
 神<sup>代</sup>郊<sup>持</sup>柱<sup>小</sup>厲<sup>之</sup>氏<sup>乃</sup>天<sup>下</sup>と<sup>た</sup>る<sup>の</sup>時<sup>を</sup>れ<sup>と</sup>

農<sup>の</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>も</sup>く<sup>百</sup>穀<sup>と</sup>と<sup>の</sup>夏<sup>れ</sup>衰<sup>る</sup>よ<sup>ら</sup>く<sup>同</sup>く<sup>の</sup>  
 業<sup>繼</sup>之<sup>有</sup>り<sup>て</sup>穀<sup>と</sup>す<sup>の</sup>共<sup>工</sup>氏<sup>の</sup>九<sup>列</sup>  
 覇<sup>乃</sup>時<sup>の</sup>よ<sup>と</sup>后<sup>と</sup>よ<sup>く</sup>九<sup>列</sup>と<sup>平</sup>ぐ<sup>成</sup>る<sup>も</sup>  
 祀<sup>て</sup>い<sup>く</sup>社<sup>と</sup>す<sup>い</sup>つ<sup>り</sup>  
穀<sup>豊</sup>邑<sup>の</sup>と<sup>く</sup>業<sup>百</sup>穀<sup>と</sup>と<sup>樹</sup>神<sup>の</sup>  
稷<sup>を</sup>百<sup>穀</sup>乃<sup>と</sup>あり<sup>て</sup>穀<sup>と</sup>と<sup>す</sup>  
 乃<sup>社</sup>と<sup>書</sup>る<sup>も</sup>人<sup>民</sup>と<sup>生</sup>る<sup>も</sup>す<sup>の</sup>成<sup>り</sup>る<sup>も</sup>  
 一<sup>に</sup>は<sup>く</sup>社<sup>日</sup>の<sup>村</sup>民<sup>た</sup>が<sup>ひ</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>て<sup>酒</sup>食<sup>の</sup>  
 酸<sup>飽</sup>と<sup>れ</sup>と<sup>ん</sup>え<sup>り</sup>張<sup>演</sup>の<sup>社</sup>乃<sup>乃</sup>乃<sup>乃</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>  
 以<sup>て</sup>醉<sup>人</sup>帰<sup>と</sup>他<sup>と</sup>り<sup>又</sup>け<sup>日</sup>れ<sup>酒</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>  
 亦<sup>は</sup>海<sup>羅</sup>神<sup>事</sup>と<sup>書</sup>法<sup>と</sup>







うゆりふまふりり又よくい月法果本に培へ  
 い月法葦根と挿し收むし沈む中へ管供へ  
 しく古法葦葉と挿しよ多く二月八月と用ひこれ  
 漬よるの類ひ但二月の葉己に葉一八月の苗よ  
 根と存よるよと記す人少しと云はれ難くまてい葉  
 自付と世の大半根と用り物之宿根ありて葦葉を  
 付より一津澤にぬくの根よゆて向ふなりこれと  
 候んとすふ葦根地葉とみくかよ苗か記付され  
 葉として沈あり苗あり付しと人置とく浮きりその宿  
 根をも物とみれらる苗か記とくまてい葉ありて向付  
 へとみれら根生ひるま己よ是てまてい葉と  
 今い葉まのまてい葉并りざり付されすかたら根を解に  
 漬しよるよ苗の根を懸く懸しこれと新へり  
 葉と用り物と葉初く長息とる所より芽を用り物  
 芽乃あり所よと葉と用り物と葉初く芽の叶と取  
 葉と用り物との葉と成すに取られ漬りよ付月  
 とみすへりよ葉と土氣よ吹り天付懸休あり葉地  
 二月の葉を并りその葉よ乃中よとを名り四月よ  
 ひくくろしよ白葉と葉大葉葉のよとく人別四月  
 芽葉と葉の葉を葉用りこれと葉を

うゆりふまふりり又よくい月法果本に培へ  
 い月法葦根と挿し收むし沈む中へ管供へ  
 しく古法葦葉と挿しよ多く二月八月と用ひこれ  
 漬よるの類ひ但二月の葉己に葉一八月の苗よ  
 根と存よるよと記す人少しと云はれ難くまてい葉  
 自付と世の大半根と用り物之宿根ありて葦葉を  
 付より一津澤にぬくの根よゆて向ふなりこれと  
 候んとすふ葦根地葉とみくかよ苗か記付され  
 葉として沈あり苗あり付しと人置とく浮きりその宿  
 根をも物とみれらる苗か記とくまてい葉ありて向付  
 へとみれら根生ひるま己よ是てまてい葉と  
 今い葉まのまてい葉并りざり付されすかたら根を解に  
 漬しよるよ苗の根を懸く懸しこれと新へり  
 葉と用り物と葉初く長息とる所より芽を用り物  
 芽乃あり所よと葉と用り物と葉初く芽の叶と取  
 葉と用り物との葉と成すに取られ漬りよ付月  
 とみすへりよ葉と土氣よ吹り天付懸休あり葉地  
 二月の葉を并りその葉よ乃中よとを名り四月よ  
 ひくくろしよ白葉と葉大葉葉のよとく人別四月  
 芽葉と葉の葉を葉用りこれと葉を



此月日と推く矣作と一西病あり人今二月又月  
宵十一日よ灸して湯守とたむけ御終とさる  
丁一山月三里級骨と七世灸して毒氣と候也  
聚と云く脚氣衝らるる疾ありと毒氣叢書より  
より夜乃方書と危非人非とて年月日付り  
際て禁灸の日あり乞素問難經等より古昔明醫  
乃と云ざるあり流世神者の候も此の候とるに是  
すた河季の雨と書はたの候とあり交の候より  
あり候と云候あり冬は肺にありと云る毒  
問乃と云とかれらるる候と云く穢毒聚英と記す

又山月毎月此と推く二百條程とれは毒氣と  
申當初くあると云はる時如く夫婦の事と云く  
月令廣義と云く下  
天季和暖の候郊外と稱す並説して血氣と解  
釋と云く  
未子乃御儀よと云く月終よ仲夏令余男女と云り又  
郡終此堤氏の御は法陽交以成婚終順天時也云  
是ハ山月を男女嫁娶乃礼をゆく宜く三月あり  
山月遊と食ハ大に益ありと千金方ハハ免と食  
ハ穢と傷ヲ離すと云くハハとやする莫也宗及凍茹と



くくハ痲疾と名と梨子と食するやうれ大蒜と食  
て人をして氣あせがくハ小蒜とくハ人の  
志性<sup>志性</sup>とわゆ<sup>志性</sup>の最<sup>志性</sup>生<sup>志性</sup>冷<sup>志性</sup>と食すると忌<sup>志性</sup>又<sup>志性</sup>陰<sup>志性</sup>の流<sup>志性</sup>泉<sup>志性</sup>  
を飲<sup>志性</sup>く<sup>志性</sup>や<sup>志性</sup>瘡<sup>志性</sup>瘡<sup>志性</sup>と名<sup>志性</sup>ハ  
月令廣義本草

二月乃古候才一柵始兼才二倉庚鳴才三鶯化乃  
鶯<sup>鶯</sup>才<sup>鶯</sup>六始<sup>鶯</sup>電<sup>鶯</sup>才<sup>鶯</sup>春<sup>鶯</sup>分<sup>鶯</sup>の<sup>鶯</sup>三<sup>鶯</sup>候<sup>鶯</sup>なり  
鶯<sup>鶯</sup>ハ<sup>鶯</sup>晝<sup>鶯</sup>四<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>七<sup>鶯</sup>刻<sup>鶯</sup>又<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>分<sup>鶯</sup>夜<sup>鶯</sup>五<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>二<sup>鶯</sup>刻<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>分<sup>鶯</sup>春<sup>鶯</sup>分<sup>鶯</sup>  
乃<sup>鶯</sup>五<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>刻<sup>鶯</sup>夜<sup>鶯</sup>五<sup>鶯</sup>十<sup>鶯</sup>刻<sup>鶯</sup> 月令廣義

三月 節と節の中間と穀類と云○三月の天名 季春晴川  
蠶卵 蟄と始知と云○三月乃和名と海と又東の  
いそく風をゆくすうておもむくとや  
いよのやむい月とよと野なり

二日 沐浴 艾燻と書す  
三日 今日と重三と云又よまの初とよまの  
いけ一と二月初乃巳の日と云くと色す 月令  
辰月をさへ巳と陰日とす 不祥を遠くさすなり  
流<sup>流</sup>約<sup>流</sup>の<sup>流</sup>宋<sup>流</sup>書<sup>流</sup>よ<sup>流</sup>籍<sup>流</sup>より<sup>流</sup>以後<sup>流</sup>二百<sup>流</sup>と<sup>流</sup>用<sup>流</sup>と<sup>流</sup>己<sup>流</sup>乃<sup>流</sup>日<sup>流</sup>と  
拘<sup>拘</sup>く<sup>拘</sup>似<sup>拘</sup>と<sup>拘</sup>り<sup>拘</sup>ゆ<sup>拘</sup>と<sup>拘</sup>今日<sup>拘</sup>艾<sup>拘</sup>燻<sup>拘</sup>と<sup>拘</sup>食<sup>拘</sup> 柵<sup>柵</sup>花<sup>柵</sup>酒<sup>柵</sup>と  
乃<sup>柵</sup>艾<sup>柵</sup>燻<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>煎<sup>柵</sup>煎<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>なり  
今日<sup>柵</sup>艾<sup>柵</sup>燻<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>く<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>考<sup>柵</sup>く<sup>柵</sup>と<sup>柵</sup>煎<sup>柵</sup>煎<sup>柵</sup>時<sup>柵</sup>代<sup>柵</sup>り



三月三日用麴乃汁とろく密く合じ移し和す  
 名付て麴粉音振米とよみこれと食と並べ厭いと  
 氣とろくせり又中多し見麴酒中山酒除痰塵  
 疔去熱嗽雜米粉合甜美ありとろくこれとて  
 刃豆のりろくし鼠麴徳と用りく之をとり又  
 文徳家孫才一書又田知くま何り儂と母と書と  
 名つく二月又始く生じ薑と和してとろく二月  
 三日又婦女これとろく蒸し搗くして儂と書と  
 えく菓と書とほくろくろく我 國中今一六  
 鼠麴徳と用りく刃とろく乃比より鼠麴と

用ひどして艾と用ひたりしとや又綿繡豆粉を  
 小のろくを厨乃出王れ時或人草餅を汁うて齒  
 王よなや歯痛とろくれ味の美たりととと製してこれ  
 餅好物あり家庭に於て周乃世大に治り逐つ  
 本草と致へしとろく後人ば事とお徳とく三月  
 二りの草餅を依り組置にまじむ草餅のかこり也  
 たりとろくまねりとも人志るももは後たりたりか  
 時とろくびくとも歯痛代かとりしとてはとて草  
 餅くすしとろくすわはたは淋會乃後たりと  
 位とろくしとろく歯痛代かとりしとてはとて草



よみむ重月金産義は法天ままを引ていよく三百粒  
花と糸を湯よひて一これとのめ病を除く糸を  
たうらひのちろん粒を湯よ浸さひてこの粒と  
用て一ちろん粒と膠をれ鼻血のてくやまひて  
也るまよんえり

○そあろ一六倍部よ考姓先程乃律まはあ内合  
ととくむ方粒あり世國乃人とかぬすのち百事か  
たり倍部よ元りた外上已後午星夕中元市湯を  
乃粒方ろとれ世倍の煮すの内行てよのくろれ粒也  
膳食もよく考姓一宴樂は志ろる考姓先程よすあ

さゆいんまこころよりひ又豈死よ事ら事せよ事り  
りあくく亡に転りておよ事らうてくもり乃さるん  
や菊ゆいんを内代果蔬もの粒也時食くの上巳の  
草恒指午乃粽中元乃蓮系飯市湯の菊湯菓子  
飯の粒ありととと盤よもりて盤系は飯之ー一月  
初よ雜煮とととひり粒れー

○のあへい今日曲水乃宴とたのち川乃上よ通遠  
一後櫻志く流水乃觴とうろろ代杯の品茶とと  
ざらはれよ糖と他ろくその杯と酒酒とけく飲  
々ふ事あり酒觴と糖とをどらるもはるあろー



終身治平よりく晋乃武帝尚書執事虞より  
よく二日の曲水をも義何とり扱や執事虞對して  
澄代章帝乃時平系れ徐肇二月初とゆく三人  
乃女とせし二日よびりて三人より小舟一奴一村  
の人の怪しめてこれと多激く携携く盟洗  
し遂は流水より多とうてこれとのじゆある宴  
あゝの起り帝のいよくは飲のよくあつべ任事  
はありし尚書郎束皙をまよせしめく執事  
執事少んぞとれと考くんやむく周公ト考く後  
邑と考く海ありに國く危と考くふあは逸ははく

羽觴泛波又秦代昭王三月と色墨河の如令入る  
て多而より出水の如と持しよく令君割有西  
及秦乃霸統侯因此立の曲水並は後漢と考り  
お返くこれ並事との帝乃よく善令あ中  
東都より賜ひ執事虞とた遷去く陽城乃令せり  
と考くあくれと束皙の言と又一時附令の  
けと考くあつひ又凡土記あは後漢の鄭虞考  
とわけたりりりり後漢書禮儀志より三月と已友民  
益獲飲于流水と考り考く澄代はとてこれり  
りり鄭虞と考く考くあつひ鄭乃國の俗

書紀

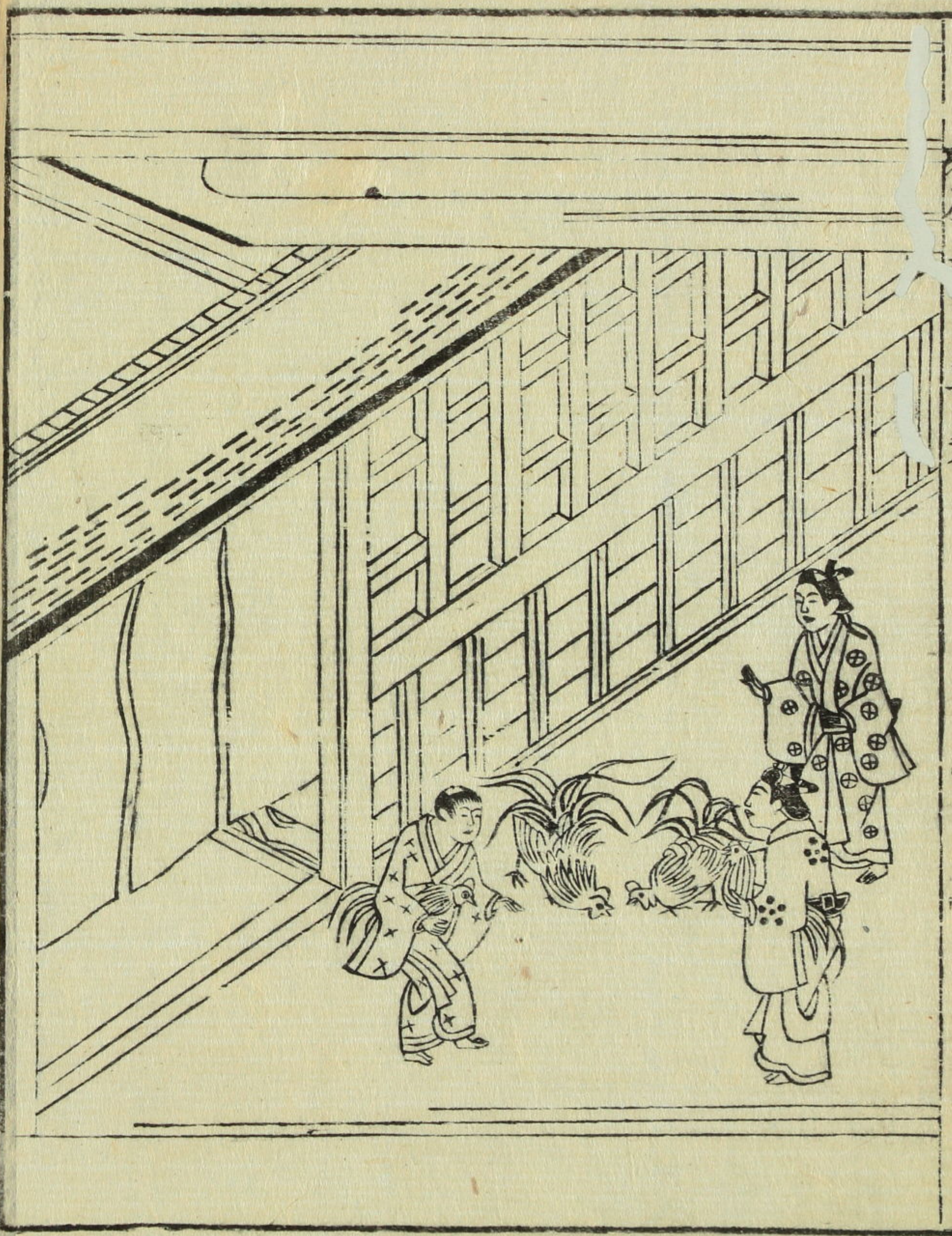
四



三月己卯日蘭とありに宗と石祥と被陰とあり  
 信經の郵風より又芳名をみ清り活する海濱に  
 引れえろれ始之よ事なり  
蒲穎士襍飲序撰述  
 徳也郵風有之蓋取法  
 胡萌食區陽氣敷也握芳蘭臨清川乘和瀾櫻用徽介社蓋取法  
 矣汲之梓魯令三月冥序云へ酒食出于野曰襍飲吉保也  
 我朝ゆき曲水乃宴とけり幸歌宗天宮に  
 御宇より始りけりけりて家國より曲水  
 乃宴の初儀とあり人をも中侍えたりと  
 徳樂合舞は日本三月三日有桃を水宴とあり  
 被陰玄今よ定家は曲水の宴なり  
 史くりたまき書成しひ乃そくあるなり

あり花代さる月又とる女事合よとあり  
 ありひのありはあつりつとあり  
 ありよ事なり  
 ○又今日諸合とありあり世後河をよとあり  
 乃事と明皇と戸流にたもまよとあり  
 一にたつとありつとあり  
 治結坊とありとあり  
 明皇の百の年とあり  
 一より一とあり  
 今按るとあり







さいし書よあつり玉燭玉典よ多食乃常  
 各誰と關一めく感くはとつり又清明代り  
 とたぐくく一知てぬりもの多しとすや信り  
 ちよ  
 たりた乃家系の家事と清和の代事なり  
 かく事して我國子をい日難合とらち  
 關縁代事と左傳よんえゆれい  
 ○い日艾と九紙く戸よまけ風ふし  
 一平金月今よんより又増半よれもすあり  
 ○今日のれわく人のぬい事よひあかり  
 しとれた人形とてわくぬるちりむかあまびの

事と源氏物語をいよとていゆれい  
 一とあり又源氏十又あまのぬる人いひかれ  
 ひいよまのそのとあまの十とあり  
 幸をく一又遠よとく事とた人形よ衣振とぬ  
 てま世帯あまをくこれとてあまのあり  
 源氏よかてちあまのいひるあり  
 他りはまのり抄よあまのいひるあり  
 臨日体信今日と三月とてあまのあり  
 けして天字融りよ昔あまのあり  
 血氣を和暢とらとるんハ丸貴遊して  
 一とあり



うらひさしきうらさふを喜ばばつる日すまじど郊野  
おろそひふ岳不宅係して詠者と兼し春と  
春一後撰集一凡河内那恒り奇

つれてさしおひくふたは喜のひとと花のまき  
ふきくきん玉巻集に二月先れんと大徳の  
要すすくわらむくしてあらるる乃後とまき  
くはうくせん又お大徳云ふ喜のまき  
先くくゆん喜はさきとあさくそむきあひ  
まのうらもあ

賈島の二月三日照劉評更詩

三月のあ二十日風光別我若吟身花忌今夜不  
須睡未あ曉鐘は是春

清明三月より二日茶乃日と宴食と云ひ日ものうら六  
先此れ墓前と掃塗してあそとたひのゆりうら  
これうらうらうら乃風俗なりさう張子理意いん  
食と十月朔日展墓不可為草木初生初死あま  
古徳と志ありくいけ日祀先乃墓前よりてお掃す  
この事よと云

は月祀戚及交友と宴す人一凡宴と食はる事  
て厚と一豊約るれ可に南久一主人乃さ



嘗て老教一々整集と云ひしは又舊書に  
て禮と失ふる事又海と云ふも人びと  
先礼の上は居るは世俗親戚男女と家と云ふ不替大  
と扱ぐ澤樂を張む人情と海と時宜と云ふ  
致子悉るは已しと儼と云ふは平昔  
徳儀樂をいふ事ありと云ふ

二四月天幕より日ありありと  
と修造し或茅屋と落改板屋と修葺と  
三月治屋室の約集と回安厩も記す

は月菜蔬花多よ葉はまき種一と交後よ菊苗二月

初又ハ中旬よりえてと云はれは  
南凡蜀黍玉蜀黍荳蔻烏芋紅豆豆豉豆菜豆腐  
豆赤豆刀豆胡麻薑眉兒豆黍石竹地芝草麻子  
荊芥香蒿などいふ月乃節のちと免うと云ふ  
紅豆々三月の中より初と種とト一又月の夜とて  
やうくふゆまのれは尖のる久し地帯温なり西の  
まかよりうゆ一丸菜蔬とゆりふと云はれ  
しと云はれはと云ふと云ふのりなは湯草蓋のり  
のゆへあり又その地帯の急眼にありて速速のかり  
り久しといふ月本と持し椀福柑柿香櫨の影々



清明乃其後又持てうしと月令廣義に及り  
 王のさ藤と九斗して灰とくまむせ日よかーとく  
 かりし灰と洗して又日にほり收まへー食する何  
 湯にひてつらぶ月四或よく煮て用の乞  
 新書乃後多り或垣淹行して筆へー垣  
 干炭を  
 野くまむ信を用ひしー又藤と狗脊と垣淹  
 元乃のけりまひちま乃後七中又日と期とま  
 益好々書ふ乃ゆま今世於郡乃ひとある  
 其後六十日とく登れ部とす吉野、山中

乃其を三ま乃後六中又日とく  
 乃其により山山下にりま  
 乃其大やうたがら良系部乃心  
 楊子十のあまうか  
 乃其花候なること  
 乃其和者乃けく  
 此月小蒜及雞子と食く次又禽獸乃又  
 事なりし生薤瘡麻肉と食く  
 瘡毒熱病と食く

本草綱目卷之三

月令廣義に及り



強まらんくく生と殺とくくくして天透小瓶ハ人を  
あく事命と近しむ百草のん其花葉と食すやうと  
魚鱈と食く化せられん宿病をとぬす

三月乃古候才一初始新才二回鼠化為鴽才三初始  
見古清明の二候才一才二才三才四才五才六才七才八  
高麗才六載勝降于桑古穀田乃二候才一  
清明八登五十二刻十分夜四十七刻五十分穀田  
五十四刻十分夜四十九刻五十分月令慶義

日本書紀卷之三二畢



